

口語自由詩の
礎を築いた

詩人 加藤介春



かつて口語自由詩運動を先導し、日本の近代文学史にその名を刻んだ加藤介春。しかし今日、彼の名は、生まれ故郷であるこの福智町でもほとんど知られていません。今回は介春の62年の生涯を辿り、その生き方に迫ります。

歴史の渦に埋もれてしまった 加藤介春とはどんな人物だったか 福智の自然がはぐくんだ故郷の詩人を知る

加藤介春年譜(年齢は数え年)

明治18年(1歳)	5月16日、上野村大字市場に父・彦三郎、母・トンの長男として生まれる。本名「寿太郎」。二男六女の八人兄弟の三番目。
明治37年(20歳)	3月、嘉穂中学校を卒業と同時に上京。
明治38年(21歳)	1月、「東京韻文社」結成。詩歌パンフレット「白鳩」創刊号に「介春」の名で「闇の火皿」を発表。本格的な詩歌活動に入る。
明治40年(23歳)	3月、島村抱月の主唱により「早稲田詩社」結成。口語自由詩運動を先導する。
明治41年(24歳)	7月、早稲田大学英文学科卒業。
明治42年(25歳)	5月、「自由詩社」結成。
明治43年(26歳)	3月、実家に帰り、4月から恩師・坪内逍遙の紹介で九州日報社に社会部長として勤務。
明治44年(27歳)	4月、編集長に抜擢。社長代理も兼務。
明治45年(28歳)	6月20日、「恋の大学生」事件。未決囚として福岡監獄に収監される。4か月後の10月6日、無罪判決が下される。
大正3年(30歳)	3月、第一詩集「獄中哀歌」刊行。
大正4年(31歳)	4月、上田収作の四女トキと結婚。
大正15年(42歳)	2月、第二詩集「梢を仰ぎて」刊行。
昭和3年(44歳)	1月、第三詩集「眼と眼」刊行。萩原朔太郎による序文が寄せられる。
昭和4年(45歳)	5月、社長交代を機に九州日報社を退社。11月、福岡日日新聞社に入社。
昭和5年(46歳)	2月、全九州詩人協会の創立。賛助員として北原白秋、浦瀬白雨とともに名を連ねる。
昭和6年(47歳)	2月、第四詩集にあたる「現代詩人全集第七巻」刊行。日夏耿之介、西條八十とともに収録される。
昭和8年(49歳)	9月、福岡日日新聞社の家庭部長となる。
昭和12年(53歳)	6月、「九州詩壇」創刊。介春の呼びかけにより、九州詩社が創設される。
昭和17年(58歳)	8月、福岡日日新聞社と九州日報社が合併し、西日本新聞社となる。
昭和18年(59歳)	10月、第五詩集「黎明の歌」刊行。
昭和20年(61歳)	8月、西日本新聞社を退社、実家で暮らす。
昭和21年(62歳)	12月16日、夕食後腹痛を訴え、妻がリヤカーで病院に運ぶが、18日、腸閉塞で亡くなる。

→昭和10年の介春(当時51歳)。このころは福岡市内で家族と暮らし、福岡日日新聞社(現在の西日本新聞社)に家庭部長として勤務していた。



↑草場は、彦山川と裏山との間に位置する自然豊かな地区。周囲にはのどかな田園風景が広がり、幼少の介春はここで天分の詩才をはぐくんできた。

家で文才があった彼は、中学3年生の時に島崎藤村の詩に感動し、次第に文学の世界に心ひかれていきました。そして明治37年3月、介春は中学校を卒業と同時に上京。あこがれの早稲田の門をたたきました。

新しい詩への追求

上京1年後の明治38年1月、介春はのちの昭和女子大学の創立者・人見東明と、片上伸、原田譲二、水野葉舟とともに「東京韻文社」を結成し、本格的な詩作活動を開始。活動の舞台として詩歌パンフレット「白鳩」を発売しました。ここに初めて「介春」の名で詩「闇の火皿」を発表し、介春は「詩人・加藤介春」としての第一歩を踏み出しました。

授かった島村抱月の提唱により「早稲田詩社」が結成されました。当初のメンバーは介春と東明に加え、のちに早稲田大学校歌などを作詞した相馬御風や、「赤とんぼ」などの童謡作家として知られる三木露風、「シャボン玉」などを作詞した野口雨情。彼らは固定化してしまっていた詩壇に新風を巻き起こそうと、抱月の主張する「新しい詩(自然主義の口語自由詩)」の実現を目指し、多くの雑誌に斬新な詩を発表して注目を浴びました。「福岡日日新聞」の明治41年元日号には、郷土出身の注目詩人として、介春は北原白秋と名を連ねています。

しかし早稲田詩社は、七五調や文語体などの古い形式を完全に破ることができず、口語自由詩の形式を暗中模索する日々が続いていました。そんな中でついに、内容においても形式においても新しい「口語自由詩」が、式においても新しい「口語自由詩」が、「詩草社」の川路柳虹によって発表されました。早稲田詩社は、口語自由詩の出版を川路柳虹に譲るかたちとなっていました。

↑明治40年に結成した「早稲田詩社」の仲間と。前列左から福田夕咲、相馬御風、三木露風、後列左から人見東明、加藤介春。(「加藤介春全詩集」より)



↑介春の生家。高い石垣を組んだ広い敷地内に、母屋、離れ、蔵など数棟が建つ。現在は改築されたが、母屋は昔の面影をほぼそのまま残している。

「島村抱月の『新しい詩』...当時待望されていた「自然主義の口語自由詩」=「内容・形式共に生活に密着した詩」のこと。話し言葉に近い「口語体」を使った定型のない「自由詩」で、現実の社会、人間、自然をありのままに表現した詩。

Literary person of Fukuchi town
特集・詩人「加藤介春」